

汲古一心

— 講演より —
『書作への途』(五)

中村素堂

王羲之のもので、御物喪乱帖などは、大小の字に行草も交じっているのに一貫通して当初の字と行く行かの終わりにある字とでは比較にならぬほど大きさも違い、草書を少し曲げて詰めてあるのに軽い線と重い線の対比のよさで、爽やかにまとまっているのは非凡ですが、十七帖などは、佳いところだけ手本としてむくものを拾っているの、この一貫通のために一篇の詩文が書として鑑賞できるといった興味を見出すことはできません。

大体唐以前の人々は、整然と書くのに馴れていた人が多く、唐ではわずかに顔真卿ひとり、多く文稿にすぐれたものを遺し宗以後の人々は東坡や米芾のように、芸の多い書を作っていて、一貫通がいかにも鑑賞作品に必要であるかを論じています。本邦のもので漢字では、宇多天皇の宸翰周易抄などは、連綿するところは区切りの短いために少ないが、いかにも濃淡、潤渇自在に書いておられて、見あきない趣を持っています。

この種のものが日本の古筆に多く存在することは、一方に平安中期以後、短歌の作品が美しい料紙とともに、流れのある作品のおもしろみが人々の眼をそそっていたことにも関係の密接なものがあるかと思う。

だから漢字作品といっても、仮名書きは随分多くのヒントを与えてくれるし、また今日のようにやや重く量感のある線で、堂々と歌一首を書く

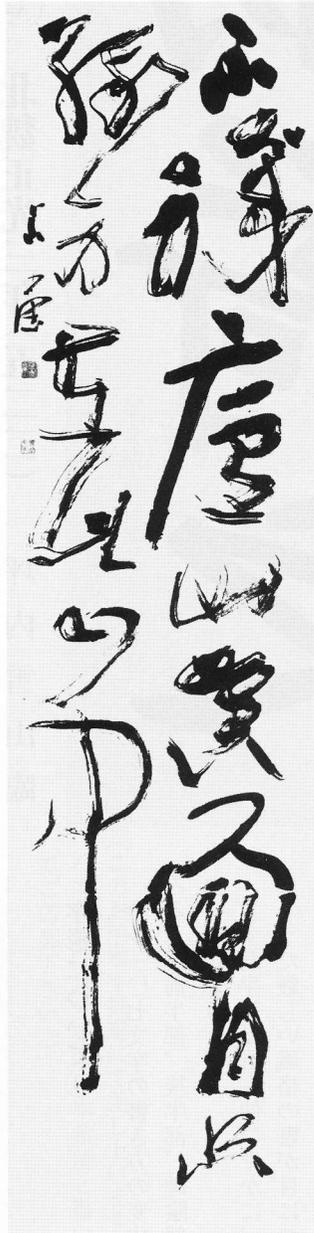
といったいわゆる硬質の書には、この漢字作品のコツの応用は随分参考になるのではないかと思う。

思うどころか、昨今はすばらしい仮名作品は、漢字をよくしない人には書き得ないといっている人も多くなりました。

実は一貫通ということになると、仮名書きほど一貫通が絶対必要であり、すばらしい作品の現存しているものが少なくない。書の世界もなかなか幅も広く奥も深いものです。

私の尊敬している日本画家で、もう物故されたが野生司香雪といてて仏画の大家がおりましたが、ある時、私が下村観山画伯の仏画の中に、膨らみのある柔かい点を列べて、衣服の輪郭を書いてあるのを見ると、いかにもその衣服に厚みがあるような感じがよく出ているのに驚きました。と話したら香雪画伯おおいにうなずかれて、僕もあれには大いに感嘆して大分使わしてもらっているよといわれ、芸術というものは、もたらわれたり拾われたりしながら肥って行くものだネ——と笑っておられた。これは書の方でも、「臨書」といって、古人近人を問わず優れたものは原典の通り復原するように習って見る。習っている間に、自分のふだんやっているものとは全く違うか、または非常に飛躍したものに遭遇することがある。あるいは遅滞が醸し出す味、颯爽たる速筆の故に趣を変えているものなどに出遭うこともある。このような時に、これをうまいなあーと見て過ごすか、いちいち記憶して書のついでに臨してみても、なるべく早い機会に手の中に覚えこんでおく。私は勝手にこういうことを展覧会などでも見覚えてきて、ある程度消化するまで真似ておく、これを眼盗というのだからなどといっています。

(つづく)



不識廬山眞面目
只緣身在山中 (昭和53年)